

Milk

vol.1



Contents

004 そうだ ゼミ、行こう。

008 open note

010 Hop! Step! Trip!

014 今、気になるあのトピック。

018 本

020 知識生情報

そ う だ

ゼミ、
行こう。

——松村研究室はどんなところなんでしょう。

うか。

「どんなところですかね。多様な人種が
うようよしているところですかね」

——研究室のWikiありますよね。

「ありますね。でもあれは、最近あんま
り更新されてないですね」

(現在、また更新されてきています)

——人が増えたんですかね。

「増えましたね。4年生は僕のところに
5人、宇陀先生のところに3人。僕のところ
は宇陀先生と一緒に、合同でもゼミを
やっているんです」

——いつも合同でやっているんですか。

「月一回4年生が一緒に、大学院生は常
に合同でやっていますね」

——合同ゼミを始めたのはいつでしょ。

「歴史を語ると、長くなりますよ。学群
生を指導できる身分っていうのが色々ある
んですけど、最初は宇陀先生と一緒にやり
始めて3人の学生を2人で見てたんですね、
それが2005年ですね。2007年度か

ましたね。

「ですね。そんな風に松村研では最初夢
と強みを模造紙に描いて下さいと……皆の
夢どこに置いたつけ」

(ゼミ生の方)

「高いところにあるから、いいんですよ
」「夢がこんなところに置いてあっていい
んだろうか」

(ゼミ生の方)

「棚の上じゃないですか」

「夢がこんなところに置いてあっていい
んだろうか」

(ゼミ生の方)

「夢が（物に）押しつぶされてる」

——1人1枚だと結構な量になりますね。

「夢ですからね。（めくりながら）研究で
どんなことをやりたいか。暖かい家庭が欲
しいとか、ニートにならないで働くとか、
地下室に映画館、ゲームプログラマーか雀
士になりたい。合気道の道場を始めたい、

「例えばですね……宇宙の果てを見たい
であるとか、機械の体が欲しいとかですね。
あとパトロンが欲しいとか、村おこしをし
たいとか。木こりになりたいとか」

——だんだんDASH村みたいになつてき
ましたね。

「ですね。そんな風に松村研では最初夢
と強みを模造紙に描いて下さいと……皆の
夢どこに置いたつけ」

(ゼミ生の方)

「高いところにあるから、いいんですよ
」「夢が（物に）押しつぶされてる」

——1人1枚だと結構な量になりますね。

「夢ですからね。（めくりながら）研究で
どんなことをやりたいか。暖かい家庭が欲
しいとか、ニートにならないで働くとか、
地下室に映画館、ゲームプログラマーか雀
士になりたい。合気道の道場を始めたい、

「ホントかなあ？　夢を語つて……たま
に現実も語ります」



今回ご協力いただいた松村研究室のみなさん (一番右が松村先生)

ら正式に学生を持つてやつています。今年
で4回目になります」

(2010年時点。2011年で5回目)

——当初の倍以上になつたんですね。遅く
なりましたが、今回の訪問、いきなりのメー
ルで申し訳なかつたです。

「いえいえ、でもあんまりお話するの得
意じやないんですよ」

(ゼミ生の方々がそろつて)

「いや先生、それはないです」

——今度は先生から見て、この松村研究室
に集まる学生の特徴をお願いします。

「色んな人がいるんですけど、一応チー
ムワークを重視していたので、チームワー
クがあるように見えないこともない」

——見えないこともない、これはそのまま
ムワークを重視していたので、チームワー
クがあるように見えないこともない

——見えてないことはない、これはそのまま
ムワークを重視していたので、チームワー
クがあるように見えないこともない

——見えてないことはない、これはまま
ムワークを重視していたので、チームワー
クがあるように見えないこともない

——見えてないことはない、これはまま
ムワークを重視していたので、チームワー
クがあるように見えないこともない

「知識の学生に一言、とかありましたよね（研究室にあったお土産を食べつつ）」

「ありましたね（研究室にあったお土産を食べつつ）。

「それなんですが、語る夢を持つていると楽しく研究ができると思います」

「先生は何をしているか

「先生の研究の話を願いします。

「僕個人で比重が大きいのは、情報探索プロセスを明らかにして、それをシステムに反映させることと、読み聞かせと絵本の選択、この二つが一本柱です。あとはそからくる育児支援のためのシステム」

「履歴を使う検索で、蓄積した履歴の情報を使いこなす方法を研究しています。履歴自体をユーザーが共有して、再構成・保存してどんな検索をするか、ということも調べて。そういうデータを提示することで、人が検索するときにプラスになつてるとマイナスになつてると評価しているのかマイナスになつてると評価しているのかを評価します」

「履歴を使う検索で、蓄積した履歴の情報を上手く活用する方法を研究しています。履歴自体をユーザーが共有して、再構成・保存してどんな検索をするか、ということも調べて。そういうデータを提示することで、人が検索するときにプラスになつてるとマイナスになつてると評価しているのかマイナスになつてると評価しているのかを評価します」

「履歴を使う検索で、蓄積した履歴の情報を上手く活用する方法を研究しています。履歴自体をユーザーが共有して、再構成・保存してどんな検索をするか、ということも調べて。そういうデータを提示することで、人が検索するときにプラスになつてるとマイナスになつてると評価しているのかマイナスになつてると評価しているのかを評価します」

「最近、休日は……ほとんど子どもの相手ですね」

「休日は何をしていますか？」

「最近、休日は……ほとんど子どもの相手ですね」

「休日は何をしていますか？」

Web

@mtsmr - MATSUMURA Atsushi

#UdMatLab - やまのハッシュタグ

<http://www.sls.tsukuba.ac.jp/~matsumur/>

て、システムを改良していく。ある機能が、上手く働いているかどうかを評価・検討すれば、その繰り返しですね」

「研究対象に絵本を選んだのはなぜでしよう。」

「小さい子どもは自分で本を選べないじゃないですか。間接的に親が選ぶ。ところが、これは先行研究にあるんです。教育目的とか過去の体験、読んでもらった絵本とかが、選択基準に入ってくるんですよ。その絵本は親はいいと思っているんだけど、子どもは実際にはいいと思っていないことがあります。親が読み聞かせをしたときの子どもの反応から、親と子どものいいと思うもののずれを出した研究がいくつかあるんですね。そういうことを踏まえて、子どものための絵本選択に関わる研究をしていまます」

「最近、休日は……ほとんど子どもの相手ですね」

「休日は何をしていますか？」



ゼミ生も先生も真剣です



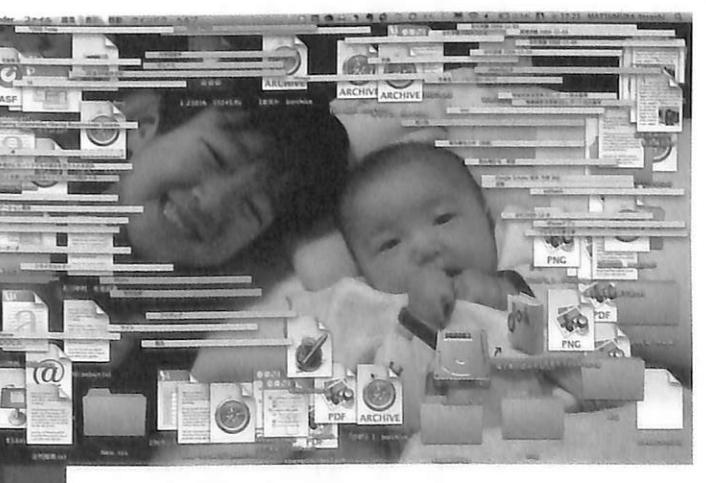
引っ越し
twitterで中継しました



↑ゼミ風景 ↓
終始いい雰囲気でした



夢
ぜひ、語れるようになりますよう！



松村先生のデスクトップ
お子さん、埋もれます……





私たちには、隣の人を知らない。

隣の人を知るための、いくつかの真実

春日は宿舎民がとても多い。今回は、実際はどのような生活がオイシイのか、学年が上がったらどうするのが良いかといった疑問に答えるべく、あなたの隣の人に対する質問をもらつた。

✓ 経験者、かく語りき

私は1年生のとき自宅通学をしていて、2年生のときは宿舎で暮らしました。そこからいえる宅通の利点は、安上がりなこと、毎日お湯をはったお風呂に入れること、家族のいる家に帰れることです。言葉にすると当たり前のことのようですが、これらはとっても幸せなことです。一人暮らしを始めるとこのことがよくわかります。実家なら部屋代も食費も光熱費も節約できます。ただこの場合、仕送りも一緒になくなるかもしれません。

しかし宅通にはデメリットもあります。まず、サークル活動や友人との付き合いが気軽にはいかないことがあります。親の外泊許可を取る時と泊めてくれる友人が必要になったときは、なんだか申し訳ない気持ちになります。

次に、知識の授業課題には実習室で行わなければ効率が悪いものがあり、締切前は通学時間ももったいなく感じました。

また親からの干渉も人によっては多大なストレスになるでしょう。

この様に、宅通も一人暮らしも一長一短ですが、慣れてしまえばどちらでも大きくは変わりません。通学に何時間もかかると別かもしませんが……。

✓ 数字、かく語りき

Q 1. 宿舎の人は、来年引っ越す？

(回答数 16)

引っ越す	5人
引っ越さない	8人
未定	3人

Q 2. アパート・マンションの人は、どこに住んでる？

(回答数 22)

春日	11人
吾妻	5人
天久保	3人
谷田部	2人
並木	1人

Q 3. 宅通の人はどこから来てる？

(回答数 8)

県内	5人
(うちつくば市 2人)	
県外	3人

✓ エクストリーム・チャリ通

チャリ通のみなさんも割とそんなでもない方もこんにちは。春日にこんな場所ができたことをご存じだろうか。その名も「自転車専用」。春日3丁目に突如現れたこの道、名前からしてさぞや3倍速く快適に走れるものだと思われそうだが、車道にそのまま水色をペイントしただけのものであるため、実際には狭い・凸凹・枝が邪魔と走ってると車の邪魔になりかねない「自転車専用」となっている。撮影時には車がこの上を走っていた。

つまるところ「自転車専用」でもなんでもない。自分の身が可愛ければ歩道(つくばでは自転車道)を走るのが良い。なんのためにラインを引いたのかわからないが、ラインが引かれたことは事実である。私はここ以外では春日周辺にこのようなラインが引かれている場所を知らない。ご存じであれば、ぜひともアンケートで場所を添えて教えて欲しい。

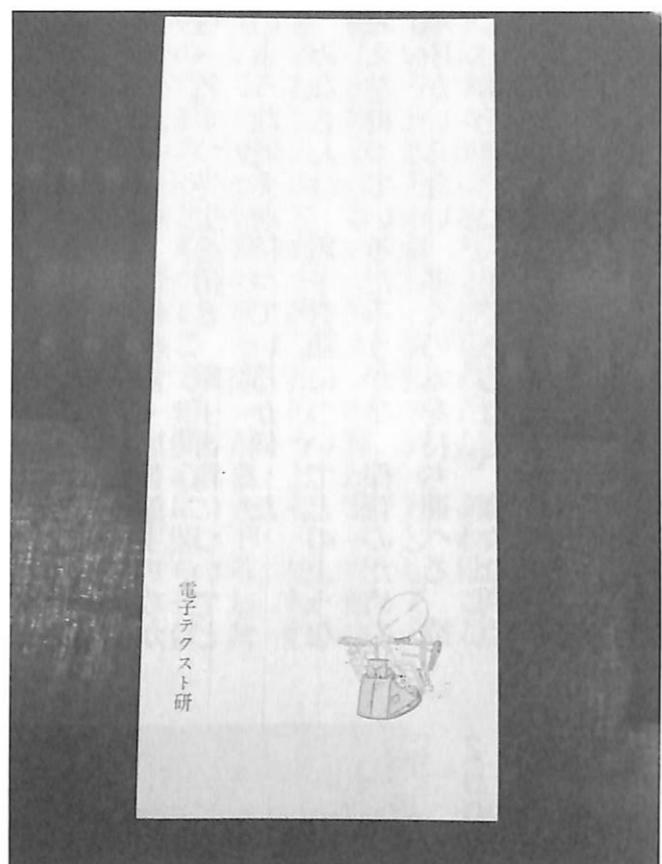


記号まで揃つていただか ここ
にあるのはほんの一部のよく
使う活字のみ。本来の印刷所
ではもつと多い。漢字は計り
知れないくらいあるので、当
たり前といえど当たり前では
あるが。さらに、並べ方は読
みのあいうえお順だったが、
本来は部首順になつていてそ
うだ。

そして今回の印刷物が、こちら。印刷とは、我々が考えているよりもずっと、大変なものである。

春日脱出計画

次回も春日からの脱出を試みる。ただし、ここで忘れてはいけないのが、春日を脱出する前に、春日での日々の



そして今回の印刷物が、こちら。印刷とは、我々が考えているよりもずっと、大変なものである。

と体験開始である。まずは新書大の木の枠に、印刷したい文字の活字を拾いに行く。筆者は四文字の本名で文字を組んだため、あまり苦戦はしなかつたが、名前が長い人や漢字仮名交じり、記号を使つた人達は非常に忙しそうであつた。拾つた活字とあらかじめ用意されている空白用の活字（他の活字より背が低く、組み合わせた時に何も印刷されないようになつているもの）を組み合わせ、げんのうで平らにならしてからインストラク

にあるのはほんの一部のよく使う活字のみ。本来の印刷所ではもつと多い。漢字は計り知れないくらいあるので、当たり前といえば当たり前ではあるが。さらに、並べ方は読みのあいうえお順だったが、本来は部首順になっているそうだ。

今回は使わなかつたが、二行以上 の時に改行に使う細長い仕切り板を「インテル」というらしい。筆者の活版にはイ ノテレ、入らなかつた……。

以上が豆粒知識である。さあ印刷！と思いきや、再び印刷機の使い方の話に。手前のハンドル（図参照）を下に引くと円盤付近のローラーが動く仕組みらしい。円盤の正体はインクであつた。二回浅めに引き、三回目を深く下ろすと、薄くて少し見えづらいかもしないが、完成である。今回は一筆箋の横に文字を入れたが、季節によつてはクリスマスカードや諺を印刷している時もあるそうだ。時間が無いという時は、出口の横でボケットカレンダーの印刷体験（所要時間三分）もやつているのでそちらも参考にしていただきたい。

は、新着図書のみの閲覧室に入つたが、専門の図書館といふのは閲覧室だけ見ていてもその専門性がよく見られて面白い。無料公開をしているので、時間がある方は利用してみると面白いかもしれない。さらにVR（ヴァーチャルリアティ）シアターというのがあるのだが、筆者は実際に見ることができなかつた……これは実際に自分の目で確かめ来てほしい。

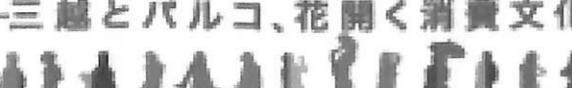
今回使用した印刷機



しどし書いてほしい。また知りたいことがある場所や人にについて、知りたいことや、会いたい人などを添えたりしてみると、あなたにとってのこの紙面が、もつと面白くなっていくはずだ。

最後になつたが、みなさんの意見を聞きつつ、次号では複数の場所を取り上げていこうと考えている。とりあえずこの原稿のあと、アド・ミュージアム東京（ADM'T）でも足を運ぶつもりだ。近場であれば、KEKやエキスポセ

ADM'Tの企画展例

[特別企画展]
WOMEN on the TOWN
—三越とパルコ、花開く消費文化—

2011/7/29 FRI ▶ **10/10** MON

今こそ春日から脱出する時だ
近くにも、遠くにも目を向けていこう。その一助に、本企画はなつていきたい。私も君も、最後まで变身しないだなんて、そんなの味気ないじやないか。ぜひぜひ本誌のアンケートに、「行ってみたいけど遠い」場所や、「他の人にもおすすめしたい」場所、「近場の

ターや、実際には行つたことのない人も多いだろう。少し遠いが、春からはつくばウェルネスパーク（ジム）にバスで通い始めるのもおすすめだ。特に新3年生は、時間割から体育が無くなる人も多くなってきてるので、どこかに出かけることで運動のきっかけをつくることでみてはいかがだろうか。

＜春日からの第三歩＞
アド・ミュージアム東京（ADMT）とは、広告とマーケティングに関する研究の振興と社会的理解の醸成を目的とするミュージアムで、広告図書館が併設されている。ADMTや広告図書館の開館時間や、休館日などの詳しい情報はWebサイト（<http://www.admt.jp/>）を参照してほしい。

国際電子出版 EXPO - eBooks は、世界最大の電子出版専門展である。さまざまな企業・学校・団体が参加する。来年の第 16 回に向けて、見に行くだけではなく、展示側としても参加を考えてみてはどうだろうか。

講師（知識科学主専攻担当）

松林 麻実子

今、気になるあのトピック。

A topic and some ideas

このコーナーでは、知識科学主専攻、情報システム主専攻、情報経営・図書館主専攻から一名ずつ先生を招き、電子書籍についてどのような考えを持っているか伺った。

みなさんは、電子書籍についてどのような考え方を持っているだろうか？保管のための場所がいらない、多くの本を持ち運べる、欲しい本をすぐに入手できるなど、様々な利点を考えることができる一方、やっぱり紙の質感には敵わない、などと思う人もいるだろう。近年、Kindleなどの電子書籍リーダーの出現に伴って、電子書籍市場は大きな広がりを見せており、日本においては、携帯電話向け電子書籍市場を中心に急速に拡大した。次の先生方の考え方を読んで、皆さんの中に様々な時事への興味、関心が生まれ、また高まれば幸いである。

コンテンツ）を提供しようとしているからである。ちなみに、ここでいうところのタブレット型ならではのコンテンツとは、宮部みゆきの『あんじゅう』に見られるような挿絵が動くものや、雑誌において著名人へのインタビュー映像やファッショントヨーの映像等とテキストとをリンクさせるようなもののこと

を指す。村上龍が昨秋上梓した『歌うクジラ』は、新会社G2010設立と共にマスメディアに大々的に取り上げられたが、あれはここでいうところの新しい情報メディアとしての電子書籍ではない。例え、内容が電子書籍にふさわしい近未来小説であろうとも、使われている音楽が世界の坂本龍一が書き下ろしたものであろうとも、ここで関心に照らせば「小説に音楽がついただけ」である。

『歌うクジラ』の事例でわかるように、現時点では、電子書籍として注目されているものとメディア研究者が注目するものとの間に明らかなズレが見られるが、タブレット型機器がもつと普及すれば、これまで電子書籍の議論にありがちであった「紙と電子メディアのどちらが読みやすいか」という二者択一の発想は消え去り、人々は何ら疑問を抱かずに「電子書籍」ならではの読み方をするようになる



のではないか（これが良いことか悪いことかは別として）。近い将来、「読書」は活字を読むだけにとどまらない、真にマルチメディアを駆使した行為に変化するかもしれない。現在注目されている電子書籍はそんな可能性を秘めた“今度こそ”的情報メディアなのである。

“またか”と思うのは、「電子書籍」に対する

本稿は主専攻色を期待されているらしいので、技術的事項に絞つて日頃思っていることを書こうと思う。私自身の研究主題ではないため、ある種のエッセイのようになると思うが、これを読んでいる方が色々と考える際の参考にでもなれば幸いである。

技術的には現在話題の電子書籍リーダーと呼ばれる端末類（以下、リーダー）や、書籍のデジタル化自体は「過去に確立された技術を実際に適用・運用する」ことなので、あまり新味は感じない。もちろん出版業界や経済・社会に影響があるだろうが企業の外にいる技術屋としては、昔アラン・ケイらの構想したダニアブック^{*1}相当の物を個人が気軽に買えるようになつたことではなく、もつと未来のことを考えるべきだろう。

今の電子書籍ブームはリーダーのブームに牽引されているが、リーダーは本当に必要だろうか。その気になればノートPCや携帯電話などでも多くの電子書籍を読むことができる。しかしながら、携帯電話、ノートPC、そしてリーダーのいずれでも根本的な問題がある。それは表示面積と携帯性の両立である。読み易くするためには表示面積が欲しいが、大きくすると携帯性が低下する。実はこれに対す

る挑戦そのものは現在に始まつた話ではないという思いがあるからである。「携帯型読書端末」という点でいえば、松下電器のΣブックやソニーのLIBRIeが発売された2004年の時点で既に商品化され、流通している。電子的な「読み物」を流通させるという意味では、『恋空』（2005年）のヒットで一気に注目されるようになったケータイ小説サイト「魔法のiらんど」が提供している作品も「電子書籍」の範疇に含めて考えることができるものだろう。いずれもこれまでの「紙の書籍」とは異なる特徴を持つ情報メディアであり、普及していれば、読者の行動に何らかの影響を与えていたものと思われる。しかし現実には、携帯型読書端末もケータイ小説も一過性のもので終わつてしまい、読者の行動に影響を与えるまでには至らなかつた。

それに比べて、目下絶賛発売中の「電子書籍」特にiPadに代表されるタブレット型は、おそらくこれまで登場した「電子書籍」の中で初めて、読書という行為の変容を「現実のものにする」可能性を持つた情報メディアである。出版業界がタブレット型機器の可能性に気付き、タブレット型ならではのコンテンツ（高解像度を利用したマルチメディア

る解決法のモデルは既に示されている。それ

は拡張現実感 (Augmented Reality : A.R) である^{*2}。A.RといえればP.Cや携帯電話のディスプレイに現実と仮想物体を重ねて表示するものを思い浮かべるかも

しれないが、あれはあくまでも今あるもので実現した例である。本来のA.Rが目指すものは、例えばアニメの「電腦コイル」^{*3}に出

てきた電腦メガネのようなものである。普通の眼鏡同様にずっとかけていてもあまり負担にならず、視野の中に現実と仮想物体を合成して見せる。この技術を用い、電腦メガネをければ目前に本や雑誌が見えればどうだろう。これなら手ですっと持っているという負担まで軽減可能である。

以上、延々とリーダにまつわることを書いたが、本学類では電腦メガネの開発は少し遠いことに思えるだろう。ただ、将来電腦メガネができた時に、今のリーダ用に作成された電子書籍||コンテンツは果してうまく読めるだろうか。今あるリーダに最適化するが故に将来現れる他の読み方に対応できないデータ形式では困るだろう。電子書籍として発行するからには特定のリーダに依存することなく、将来においてもずっとアクセス可能であ

ることを目指した方式を開発し、それに基づいて蓄積、伝達、共有を進めていくことが重要ではないだろうか。そういう観点を本学類で学ぶ諸君は身につけてもらいたいと思う。

准教授（情報経営・図書館主専攻担当）

白井哲哉

注

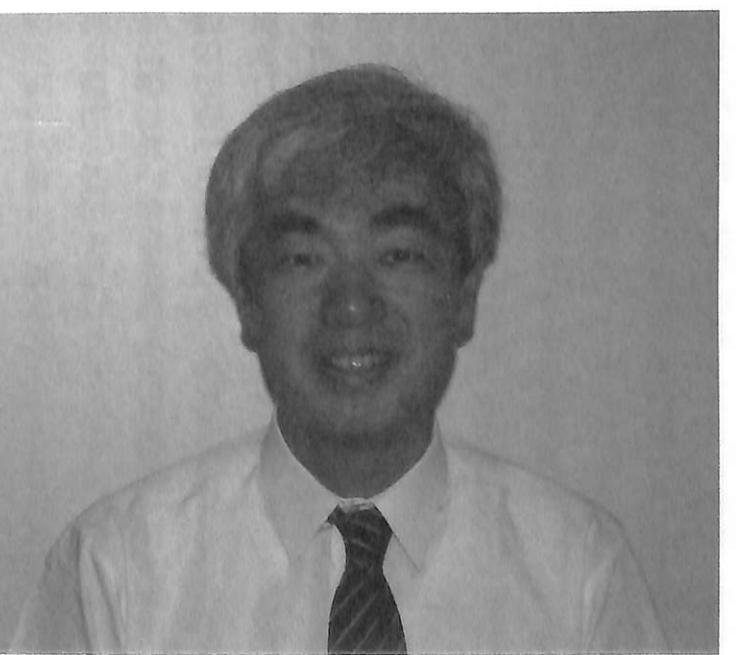
^{*1} : Kay, Alan; Goldberg Adele. Personal

Dynamic Media.

http://www.newmediareader.com/book_sam_ples/nmr-26-kay.pdf (Original Publication: Computer 10(3):31-41. March 1977)

^{*2} : 加藤博一編、特集：拡張現実感 (A.R.) 情報処理、V01. 51, N0. 4, p.p. 3 66-434. 情報処理学会 (2010年4月)

^{*3} : 磯光雄、徳間書店、電腦コイル製作委員会、電腦コイル (アニメーション作品) <http://www.tokuma.co.jp/coil/> (2010年5月10日参照)



電子書籍が「私」を消失させる、

かも知れない未来

いるアマゾンの関連書情報、書店の棚揃えの

ような情報サイト、ミニコミ書評誌のようなソーシャルメディアが将来の書籍購入に影響力をもつと考えられている。問題はそれらの情報の検証手段、他人の評価ではない「私」自身の選択を担保する方法である。

近代的自我の確立以前から著述や読書は本質的に孤独な営みである。だが電子書籍の社会は、書き手も読み手もコミュニティへの参加が必要だと言われる。携帯電話やブログなどコミュニケーション・ツールの爆発的普及が、現代人に過剰なまでの他者依存を、そして孤独の恐怖をあたり、一人一人の「私」の存立を危うくしてはいないかと感じる。

歴史から学ぶべきは、常に技術革新へ追いつけない人間の姿である。美しい未来像ばかりでなく、「人間と社会」というベタな地点からも電子書籍を考える必要はあるだろう。

(1010・五・七執筆)

以上、3人の先生にお話を伺った。みなさんは、何か思うこと、引っかかることがあるだろうか。ところで、みなさんは電子書籍リーダーに触れたことがあるだろうか。私は、たぶん、今までの投下資本を回収し終わつたベストセラー作家がそれを牽引し、文庫、新書、雑誌を中心に進むのだろう。

しかし私の研究分野、特に日本地方史関係の書籍、雑誌、資料類は独自の事情や制限があり、私の存命中に電子化が飛躍的に進むとは全然思っていないこと。これらは少なからずISBNコードを持つてなく、今だつて図書館が取り扱いに苦労している。

KindleやiPadが出現し、佐々木俊尚『電子書籍の衝撃』や前田墨『紙の本が亡びるとき?』等が示すように、この半年余りで電子書籍をめぐる議論は盛んになつた。それらを読んで私が想うのは、むしろ電子書籍の普及がもたらす書き手、読み手、彼らを取り巻く社会システムの行方である。

通常、著書や雑誌記事は、書き手の原稿を編集者がチェックして一つの形に作り上げる。電子書籍における未来の編集機能をソーシャルメディアの双方コミュニケーションに求める意見があり、そこで書き手は読み手の声を意識し反映させて執筆するという。問題は、その際の書き手の内発的動機や独創性、「私」が書きこうと思う気持ちのありかたや書きたい事柄へ及ぼす規制である。

読み手として気になるのは電子書籍の「立ち読み」、買う前に書籍を斜め読みして内容を確認できるか否かである。すでに始まつて

いる。iPad以外のいわゆる電子書籍リーダーは、まだまだ持ち運ぶという点では浸透していない。いま最も気軽に持ち運べる電子書籍は、携帯電話対応のコンテンツかもしれない。書籍はやはり、持ち運べるものであつてほしい。リーダーを使うものだけが電子書籍ではない今日断言はできないが、私の周りで電子書籍が一般普及するのは、もう少し先の未来になりそうだ。

知識情報・図書館学類 3年 菅原真紀

「俺たちがその気になればね、砂漠に雪を降らすことだって、余裕でできるんですよ」

4月、大学生活の幕が開いても、何事にもさめている北村の生活が劇的なものになることはない、はずだった。やませみ頭の鳥井、美人で愛想のない東堂、超能力を持つ南、強烈な演説をする西嶋と出会い、合コンに麻雀、ボウリングやらで遊ぶ大学生活が、通り魔、空き巣の不穏な事件へ巻き込まれていく。

テンポのよい展開と、大学生だからこそ共感できる彼らの言葉が面白い！
こんな大学生活きっとありえないけど、大学生の持つ『砂漠に雪を降らせる』ほどのパワーに気付けるはず。

今回のテーマ 出会い、始まり――

『六番目の小夜子』 恩田陸著／新潮文庫
知識情報・図書館学類 3年 小林映里奈

『マクベス』 W. Shakespeare 著／新潮文庫
図書館情報メディア研究科 教授 逸村裕

編集部からの指示は「出会い」に関する本、ということでした。

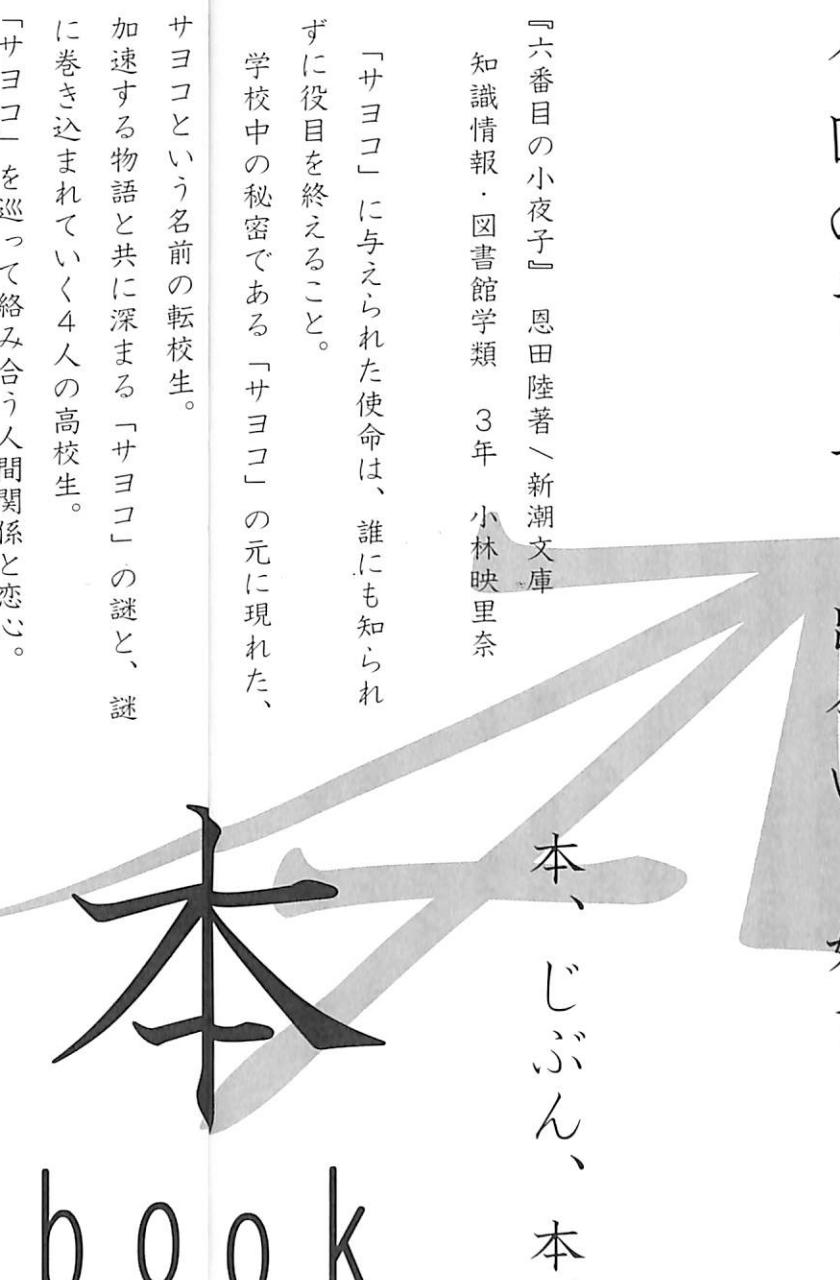
『出会い』かあ。いろいろ考えていましたが、ここでは W. Shakespeare の『マクベス』を挙げておきましょう。

翻訳は河合祥一郎、松岡和子、小田島雄志そして古くは坪内逍遙と多々あります。どれでもよいです。もちろん原文を（照らし合わせながら）読むのもOK。『マクベス』はそもそも演劇作品ですし、シェイクスピアの作品中でも韻文の割合が高いものですから、声に出して読むのはお勧めです。韻文でない「門番」場面もそれなりに面白い。実際の上演時には内容が現代に置き換えられることもあります。

『マクベス』の何が出会いなのか？ 疑問に持つ学生もいることでしょう。もちろん、冒頭、マクベスとバンクオが魔女に出会うシーンは出会いです。

私の意図としては、古典との出会い、それ以上に、500年前に作られた異国のこの作品がどのように日本と「出会い」、なぜ今だに上演が続けられているのか、を考えてももらいたいのです。

本。じぶん。本。
book



『氷菓』 米澤穂信著／角川書店
知識情報・図書館学類 4年 田島佑介

この作品は「やらなくともいいことなら、やらない。やらなければいけないことなら手短に」をモットーとする省エネ主義者の高校生、折木奉太郎が日常に潜む謎に挑むミステリー。

序盤は部室の鍵の謎、図書館の謎など小さなものが中盤から終盤にかけての33年前の事実を追求していく部分の盛り上がり方はなかなか。登場人物が高校生にしては大人びている、あるいは達観している部分はありますが、自分が高校生・中学生だったころには似たような考え方をしていた人も多いのではないか。そんな人たちにとっては感情移入しやすく、普段の生活も注意して見れば面白いことで満ちているかも知れないと思える作品です。

大口吉野先生の青辛房

このコーナーでは、知識情報・図書館学類とは何か？という疑問に学類生の視点から毎回アプローチ していかる。大学の空気にも慣れただろうか。慣れているにしろいないにしろ、まずは同じ学類の人達に話 していく。今回のお題は「知識情報・図書館学類に入学した理由を一言で」入学したての一年生は、そ うぞろいに答えてみたい。しかし話題が無い。そこで、このコーナーを活用して欲しい。また、入学してから一年 以上経ち、慣れてしまった日常に倦怠感を感じ始めている方々への何らかの起爆剤、自分のやりたい事

をしていく。今回のお題は「知識情報・図書館学類に入学した理由を一言で」入学したての一年生は、そ うぞろいに答えてみたい。しかし話題が無い。そこで、このコーナーを活用して欲しい。また、入学してから一年 以上経ち、慣れてしまった日常に倦怠感を感じ始めている方々への何らかの起爆剤、自分のやりたい事

アンケート結果は以下の通り。

司書資格が取れるから(1年) 学際的領域に惹かれたから(1年) 地元だから(1年) 一人暮らしをした
かったから(1年) 幅広い分野が学べると聞いたから(1年) 前身が図書館情報大学と知ったから(1年)
「図書館」と「情報」の融合に興味をそそられたから(2年) 夢(2年) 縁(2年) 図書館司書になるた
めの勉強がしたかったから(2年) 司書になりたかったから(2年) 文理融合に惹かれたから(2年)
図書館と名のつく国立大だから(3年) 名前が気に入ったから(3年) 先生に勧められたため(3年)
本が好きだから(3年) 事件の臭いに惹かれたから(3年) 司書教諭を目指していたから(3年) 図書
書館司書の勉強がしっかりできるから(4年) 司書資格のとれる国立大の中で、専門的に学べる所だった

かったから(1年) 幅広い分野が学べると聞いたから(1年) 前身が図書館情報大学と知ったから(1年)
「図書館」と「情報」の融合に興味をそそられたから(2年) 夢(2年) 縁(2年) 図書館司書になるた
めの勉強がしたかったから(2年) 司書になりたかったから(2年) 文理融合に惹かれたから(2年)
コンピュータ技術など実学的なことが学べると思ったから(3年) 立派な図書館員を目指して(3年)
館司書を目指せるから。今は司書にはなりたくないですが…(4年) 図書館情報学を学べるから(4年)
から(4年) 司書資格が取れ、電子図書館専門の先生が居て、情報システムも学べる所だったから(4年)

全体から、志望理由はおおよそ四つのカテゴリに分けられる。

一つ目は司書資格。この理由はどの学年にもまんべんなく票を集めている。しかし「今は司書にはな
りたくない」「司書になりたかった」と過去形で書いているところを見ると、学年が上がるにつれて現
実を見ることになるのだろうか。覚悟を持って臨めば、現実を打破できる新型図書館員になれる、のか

りたくない」「司書になりたかった」と過去形で書いているところを見ると、学年が上がるにつれて現
実を見ることになるのだろうか。覚悟を持って臨めば、現実を打破できる新型図書館員になれる、のか

二つ目は文理融合。学類のパンフレット等を見ると必ず載っているこの言葉。学類生の大半は幅広く
色々なことができると捉えている様だ。ちなみに、文理融合を理由にしていた方々に何をしたいのか詳
しく訊くと、数学がやりたかったから、文学を勉強しながら建築分野を勉強してみたかった等、非常に

色々なことができると捉えている様だ。ちなみに、文理融合を理由にしていた方々に何をしたいのか詳
しく訊くと、数学がやりたかったから、文学を勉強しながら建築分野を勉強してみたかった等、非常に

三つ目は名前。学類の名前で決めているという人も意外と多い様だ。一年次に図書館系の授業が少な
いと落胆する人が少なからずいる原因もある。カリキュラムの改訂もあり、一年生から「図書館概論」
を履修する様になったため、これからのアンケート結果は少し変わるかもしれない。

いと落胆する人が少なからずいる原因もある。カリキュラムの改訂もあり、一年生から「図書館概論」
を履修する様になったため、これからのアンケート結果は少し変わるかもしれない。

四つ目は「先生の勧め」「国立大」「地元」などのかなり現実的な理由。これは国立大学の宿命とも言
える。
その他に、少し変わったところで「事件の臭い」というものがあるが…………きっと、何か事件があつ
たのだろう。

て、学生が思うことは多様化していく。そこで、次のテーマは「知識情報・図書館学類に入って良かった
もらいたい。この場を、知りたいことを知る場所にするには、みなさんより多くの、より具体的な回
答が必要である。

創刊号付属のアンケートに、ご協力宜しくお願ひします。

知識情報・図書館学類誌

MILK

編集部 求人中

「覆水盆に返らず」
大学生として、たくさん
遊んでおきましょう。
編集部で思いっきり遊んで
くれる人を募集しています。

ミーティング日時
火曜日 11:30～
@フリースペース（掲示板裏）
木曜日 18:30～
@春日ラーニングコモンズ

連絡先
klis.milk@gmail.com



発行者 松本 紳
知識情報・図書館学類 学類長

編集長 宮田 愛

編集 福澤 糜子
神永 亜季
堀内 雅人
池田 彩佳
伊藤 小穂
北原 美穂
下城 薫理
高畠 瑞

協力 逸村 裕先生（図書館情報メディア研究科）
松林 麻実子先生（図書館情報メディア研究科）
阪口 哲夫先生（図書館情報メディア研究科）
白井 哲也先生（図書館情報メディア研究科）
松村 敦先生（図書館情報メディア研究科）

アンケートに協力してくださったみなさん
寄稿してくださったみなさん

知識情報・図書館学類学類誌 MILK vol. 1
2011年 9月1日 発行

お詫び

発行が遅れ、ご迷惑をおかけしました方々に、編集一同よりお詫び申し上げます。

